

第2回 2009年8月出発 参加者
●泉田 大介さん、ホスト：濟州大校

1. 応募したきっかけ

私の指導教員とホスト先の研究室の先生は古い友人であり、以前から共同でシンポジウムを行うなど多くの交流がありました。

その関係を学生間にも広げると同時に、養殖業の盛んな濟州でその現状を学ぶために今回の Summer Institute に応募しました。

2. 事前準備

開始直前まで自分の実験が忙しく、ほとんど準備することができませんでした。ホスト先の先生との実験や生活環境の相談を行うのが精一杯でした。

事前になるべく多く連絡を取り、出来るだけ多くの情報を得て準備を行っておきましょう。日本とは勝手が違うところが多々あるので注意が必要です。念のために韓国語会話の本も用意しました。

3. 現地研修

現地での研修として、韓国語の講義や韓国の伝統芸能を鑑賞、板門店の見学を行いました。どの研修も有意義なものでしたが、特に板門店の見学は国家間の争いの最前線を肌で感じることができ、大変貴重な経験となりました。

地図上では単なる線である国境では多くの争いによって尊い命が失われていて、現在でもその状況が続いていることを知り、実際にその場に立つと多くのことを考えさせられました。

4. この研修を通じて得たもの

研究面では今までに私が行ったことのない「リアルタイムPCR法」による遺伝子発現量測定や魚へのホルモン投与の方法を学ぶことが出来ました。また、韓国の学生さんの実験の手伝いを行い、韓国での研究の現状を学ぶことが出来ました。

しかし、今回得た最も大きな収穫は韓国の学生さんや先生方との「つながり」であると思います。初めての韓国で

言葉も満足に通じず不安でしたが、私が困っているときには身振り手振りで一生懸命教えてくれました。

私の場合韓国の学生さん達と全ての期間同じ部屋で共同生活を送っていたのですが、そのような研究以外の日常は何物にも代えられないかけがえのない時間であったと思います。今回得られたこの関係は、今後も日韓共同で研究を行う上で大変重要となると思います。

5. 参加する人へのアドバイス

正直なところ、私は応募したものの、初めて海外へ行く不安感などから当初はあまり気が進んでいませんでした。

しかし、いざ韓国へ行き、実際に生活、研究してみると、そのような不安はあっという間に消え去りました。韓国の人はみんな親切で、困ったことがあるとすぐに助けてくれます。

学生さんは割と英語が通じる人が多く、中には日本語が堪能な方もいるので、あまり気にする必要はないと思います。しかし、飲み会の席や食事の際に韓国語を話すと大変喜ばれるので少し勉強しておく方が良いと思います。

初めは様々な不安があるかもしれませんが、迷わずに一歩踏み出してみてください。きっと新鮮で貴重な体験ができると思います。

